
記憶屋交響曲

板井虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶屋交響曲

【Nコード】

N9977Z

【作者名】

板井虎

【あらすじ】

近未来、国の管理の下、事件解決や治療等のために記憶操作が行われていた。記憶操作は【記憶屋】と呼ばれる者たちによって行われるが、辛い難しい仕事の為、数が少なかった。そのため記憶屋不足解消のために日本政府は記憶操作の出来る女性型アンドロイド・ステラを開発した。ステラの教育を任されたのは優秀な記憶屋で【記憶人】と呼ばれる新月刹那。人間のようになりたいと望むステラと機械になりたいと望む刹那のちぐはぐな二人の織りなす物語。

P r o l o g u e

西暦2984年、人類の平均寿命は百歳を超し、長寿のため記憶を失くす人々が増えてきました。ほとんどの病気は病院で治せませんが、記憶を回復させることは困難です。

そこで記憶学という新しい専門分野と、【記憶屋^{きおくや}】という、職業が出来ました。

記憶屋とは、主に記憶障害者の記憶回復、犯罪者の捜索、犯罪動機の調査等、記憶に関することを専門的に取り扱うお仕事をする人達の事を指します。

しかし記憶を扱うのはとても大変で、精神的疲労や命の危険晒されることもあり、記憶屋になっても途中で辞める人は少なくありません。そのため、現在世界中が記憶屋不足で困っています。

そこでWMO 世界記憶機関 は、各国に記憶屋不足の解消を呼びかけたのです。

各国は様々な方法で記憶屋不足対策を講じるなか、日本は記憶操作のできる機械を開発し、大量生産することにしました。

日本政府は世界的に記憶学会の中でも権威のある博士に仕事を任命しましたが、この博士は一癖あり、普通の機械ではつまらないと言い始め、記憶操作の出来るアンドロイドを作ることになりました。

そうして、私が生まれたのです。

? - 01 The Start

林のように建つ高層ビルに不思議な形をした建物、そしてその合間を縫うように道路が走り、空中には高速道路が蜘蛛の巣のように広がっていた。

空中高速道路を走る車の中に、次々と車を追い越している黒いバイクがいた。

そのドライバー、にいげっせつな新月刹那が風を切りながら走っていると、左耳に着けられているピアス型の通信機 コミュニケーションピアス、通称CP に連絡が入り、無言で回線を繋ぐ。

繋ぐとすぐに元気の良い男の声が頭に直に響いた。

『もしもし、せっちゃん元気ー？ていうかちゃんとご飯食べてるー？どうせ栄養食品で栄養しか摂ってないんでしょー？そんなことしていると胃がちっちゃくなっちゃー』

プツ。

男はすぐさまCPを切ったが、再び連絡音が頭の中に鳴り響く。仕方なく刹那は返事をする・・・が、先に反論を浴びた。

『いきなり切るなんてひどいじゃないかせっちゃん！』

「・・・・・・・・」

『記憶屋の新月刹那さん、聞こえてますかー？』

わざとらしく言う男の声に対して刹那は無機質に答えた。

「一体何の用だ。」

『ひどい言い方だな。せつちゃんのことを心配してるだけなのに』

「用がないなら切るぞ。」

『ちよい待ち！ちゃんと用事あるから！今回の用件はね、2時に国立中央記憶学研究所の僕のところに来てね。あ、これ国家最重要命令だからよろしく！んじゃ』

「おい・・・」

プツッ

男は口早に用件を伝え、今度は逆に一方的に切られた。

「・・・」

今の時間は1時35分。このまま研究所へ向かわなければ確実に（強制的にさせられた）約束の時間に間に合わないだろう。

仕方なく刹那は一気にバイクのスピードを上げると、区切られた反対車線に向かってバイクで跳びこむと無理やり割り込んだ。

常人では決して出来ない荒技で急に反対車線から落ちてきたバイクに対し、周りの車は驚きクラクションの大合唱をするが、刹那はそんなことは気にせずにバイクのスピードを上げ、丘の上にそびえる国立中央記憶学研究所へと向かって行った。

国立中央記憶学研究所は、別名ホワイトフラワーと呼ばれている。中央のビルを囲むように六つのビルが建ち、放射状に研究施設が建てられている。そのため上から見るとまるで花のような形をしているのだ。

世界一記憶学の研究が進んでおり、設備も充実しているため記憶学研究者の憧れの場所なのだ。そのためここに来るためにはそれなりの功績を残すか、優秀な大学でトップクラスの成績で卒業しなければ入ることが出来ない。

ここでは国から記憶学の研究を請け負っているため、警備も厳しい。

ゲートの前には最新型警備ロボットが4体おり、傍の小さな建物の中にはアンドロイドが居て、スピーカーを通して刹那に話しかけてきた。

『こんにちは。こちらは国立中央記憶学研究所です。お名前とご用件をお伺いします。』

「新月刹那。この所長に呼ばれてきた」

『本人確認のため、身分証明IDをお預かりします。その間にこちらに手をかざしてお待ち下さい』

刹那は既に用意していた身分証明IDをアンドロイドに渡すと、横にある円盤の上に手をかざした。円盤は光りだし、静脈や指紋の情報を読み取り始めた。すぐに解析は終了すると円盤の光りが消えた。

『新月刹那様、ご本人とご確認いたしました。ようこそ国立中央記憶学研究所へ。乗り物の方はこちらでお預かりいたします。研究所の入り口はあちらとなります』

にこやかにアンドロイドがIDを返すと刹那はそれを受け取り、バイクから降りると、警備ロボットが一斉に退き、ゲートが開いた。警備ロボットの一体がバイクに近づきコードを送ると、バイクは自動的に動き出し駐車スペースへと送られた。

刹那はゴーグルを無造作に外すと研究所に向かっていった。

研究所のロビーは広く吹き抜けになっていて、研究所の制服を着た人たちが行きかっていた。

刹那が中に入るとロビーは色めき立ち、刹那は自然と周りの注目を集めていた。

それは外部から来た者というのもあったが、刹那の外見が美しいこともあった。

漆黒の艶やかな髪、色白の肌、中性的な顔立ち、綺麗な二重の中に覗くのはルビーの様に美しい瞳が覗いている。性別すら超越した美しさは、完璧に作られた人形のようなだった。

そんな中、本人は気にせず受付に向かい呼び出した張本人の居場所を尋ねた。

「2時に東野陽にここに来るように言われているんだが、あいつはどこにいる」

「えっ?! あっあの東野所長にどのようなご用件でしょうか?」

刹那に見惚れていたが我に返った受付嬢が頬を染めつつ慌てて聞き返した。もう一人の方は完璧にノックアウトだ。

「聞いていない。一方的な呼び出しだ」

「ではお名前の方は・・・」

「新月刹那だ」

「！ 分かりました。今すぐ調べますので、しばらくお待ち下さい」

受付嬢は顔色を変え慌てて顔を逸らすと、急いで調べ始めた。もう一人はまだ目をハートにして刹那を見つめ惚けている。

刹那は受付を背もたれにして待った。その間に通行人はざわめき様々な視線を集め始めていたが、本人は気にしていなかった。刹那はもう慣れていた。注目を集めることに。気にしていたらきりが無いのだ。

「新月様、所長は只今A館の22階の特別研究室に居ります。特別研究室には一部の研究者しか立ち入ることが出来ませんが、今回はご予約されているということですので、エレベーター付近に迎えの者がお待ちしております。その者が御案内致しますので右正面のエレベーターから22階へどうぞ」

「分かった」

受付嬢は顔を染めながらも落ち着いて案内をした。刹那は内容を聞くとすぐにA館の方のエレベーターに向って行った。

刹那が去った後、受付嬢たちは蓋を切ったように盛り上がっていた。

「ちょ、今の人がかなりカッコよくない?！」

「ホント!しかもあの新月刹那よ!!!まさか会えるなんて思ってもみなかったわ〜!」

「マジ?!ウツソ超ラッキー!!!」

「あー、また会えないかしら〜」

長いエレベーターで22階へ向かいロビーへ辿り着くと、そこは白衣を着た人達ばかりだった。ロビーの中央には植物が飾られ、それを囲うように椅子が置かれていた。どうやら憩いの場として使われているらしい。

刹那がエレベーターから降りると、長椅子に座っている制服を着た明るい茶色の髪色で、目がクリクリした可愛い女性が刹那に気付き近寄ってきた。

「あのお、もしかして『記憶人^{きおくびと}』の新月刹那さんですか？」

「・・・ああ」

刹那は興味なく肯定すると、女性は目を輝かせて元気に話し始めた。

「私、記憶操作制御ガイノイド・オペレーションシステム開発部の^{さいとつみき}斉藤実樹^{さいとうみき}って言います！東野所長に言われて新月さんの案内係としてきました！お忙しい中来て下さってありがとうございます！」

「ああ」

「それにしても新月さんって若いしカッコイイですねえ。記憶人って世界に8人しかいない凄腕の記憶屋じゃないですか。なのでもつとこう、仙人みたいなおじいさんみたいなのを想像し・・・」

「こんなところで喋っていいのか」

「あ！そうですね。立話もなんですし、研究室の方に向かいましょうか。研究室の方がゆっくりお喋りできますしね！」

「・・・」

「では私についてきてください！」

刹那は延々と喋る斉藤を止めるが、今度は元気に研究所の案内と雑談を織り交ぜながら目的地へと向かっていった。刹那はほとんど聞き流していたが、斉藤はそんなのは全然気にせず話し続けた。向かう途中もすれ違う人たちのほとんどが刹那を見ていた。

「ふふ、みんな新月さんのこと見てますね」

「どうでもいい」

「なんだかカツコイイ彼氏を自慢してるみたいで快感です」

「まだ着かないのか？」

「もうすぐですよ。あ！あれが特別研究室です。ここの特別研究室はA館にあるのでAゾーンって言われてます。覚えやすいでしょ？」

隔壁には大きく『A』と書かれており、左隅に認識機とドアがついている。

「あそこは許可されている研究員しか入れない特別な場所です。いま開けますね」

斉藤は認識機に認識証をかざしてパスワードを打ち込み、虹彩認識を済ませると、円盤の上に手をかざした。

『認識が終了しました』

ドアのライトが赤から緑に変わると、自動でドアが開いた。

「さ、開きました。では行きましょう！」

「.....」

齊藤に促され二人がドアを通り過ぎるとすぐに自動ドアは閉まった。中は白くて両側にドアが間隔を置いて並んでいる。

「この研究所はA、B、C、D、E、F館とあるんですけど、A館が一番重要な仕事を扱っている場合が多いんです！だから結構勤めている館によって偏見持ったり、やつかんでくる人たちも居ますけど、Aゾーンに勤めている人たちは変わり者が多いからあんまり気にしてないんですね。あはは！」

「……」

「言っておきますけど私は全然変じゃないですからね。あ、あそこが一番奥にある扉が目的地です！」

ほぼ齊藤一人で話していると、長い廊下の突き当りに大きなドアがあった。しかし閉まっているため中は見えない。そしてAゾーンの入り口同様に認識機が付いている。しかし今度はそれを使わず、齊藤は認識機の横にチャイムを押した。

ピンポン

「齊藤実樹、新月刹那さんを連れて、ただいま見参です！」

齊藤がカメラのある方向を見てビシッ！とポーズをとると、音声が聞こえてきた。

「ああ、おかえりミキちゃんー。今ロック解除するねー・・はいどーぞー！」

「どーもどーすさ、行きましょ新月さん！」

「……」

刹那はこちらに来たことを今更になって後悔し始めた。

「ジャジャーン！ここが記憶操作制御ガイノイドのメインラボです！どうです？すごいでしょー！」

「・・・ああ」

確かに室内はすごかった。

広い空間に何台ものコンピューターが綺麗に並んでいて、中央にはメインコンピューターが置いてある。

ほとんどの研究員はコンピューターに向かっていているが、近くを通るとだいたいの人が斉藤や刹那に対し、おかえりや、いらっしやいなどと声を掛けてくれた。

斉藤はメインコンピューター前の話し合っている男女の下へ刹那を連れてきた。

「西田副しゅにーん！ 新月刹那さんをお連れしましたよー！」

二人は気付くと、刹那たちを見た。

「お、やつとお出ましかあ」

「斉藤さん、お疲れさま。ただお客様の前ではきちんとしなさいってあれ程言っただでしょう」

しつぽを振って近づいてきた斉藤に対して、綺麗に黒髪をひつめ、眼鏡をかけて制服の上に白衣を着た知的な女性が斉藤を嗜める。しかし斉藤は嬉しそうに笑っていて全く反省をしていない。

「えへへ、すみません」

「まるでお母さんだな」

「……」

へへつと男が茶化すと斉藤は押し黙った。男は無精ひげを生やし、ニヒルに笑う姿が印象的な男だった。男は刹那に近寄ると、手を差し出し軽く自己紹介した。

「俺はこの研究員の塚田吾郎だ。ようこそワンダーランドへ」

「ワンダーランド？」

「はい！このラボの研究員はイカれていると思われるので『ワンダーランド』って呼ばれてるんですよ！楽しい職場なのに失礼ですよねー！」

斉藤が楽しそうに補足した。同様に口の端を上げ塚田は楽しむように刹那の顔を見た。

「確かにこのやつらは変わっているが根はいい奴らだ。まあ気に入んな兄ちゃん」

「……」

刹那は無言で嫌そうに塚田の手を力なく握り返した。正直係わり合いになりたくなかった。あの上司にしてこの部下あり、という感じだ。

塚田は刹那の手を話すと意気揚々と携帯パソコンを取り出した。

「ところでさ、俺の娘が今3歳なんだけど、これがまたすっぱー可愛いんだって！動画あるんだけど見……」

「……塚田さん、あなたは調整を早く済ませて下さい。斉藤さんも

まだ仕事が残っているでしょう？」

「ちつ。へいへい分かりましたよー」

「うう、はぁーい」

西田は娘自慢を始めようとした塚田を制止し、斉藤と共に退場させた。

「・・・」

刹那がその様子を見てみると、西田は刹那に向き直り丁寧に挨拶をし始めた。

「御見苦しいところを見せてしまい申し訳ありません。本日は忙しいところをわざわざお越しくださり有難うございます。私は記憶操作制御ガイノイド・オペレーションシステム開発部・副主任の西田玲子です^{いただいたこと}」

「・・・記憶屋の新月刹那だ。急に呼び出して一体何の用だ」

「東野所長からお聞きになっていないのですか？」

「ああ。さつき2時にここへ来いと言われて電話を切られた」

西田は少し眉間に皺を寄せ苦い顔をした。

「・・・本当に適当な上司で申し訳ありません」

「いつものことだ」

「本日こちら来ていただいたのは、私たちが造った記憶操作制御アンドロイドのことについてです」

「お前たちが作っていたのは記憶操作制御装置じゃなかったのか？」

「当初はその予定だったのですが、東野所長がそんなのじゃつまらないと我が儘を言い出し、遠回りをして女性型人造人間 ガイノイドになったのです」

「あいつらしいな」

「まったく・・・」

すると西田の背後から、呑気な声が聞こえた。

「でしょ？」

色素の薄い茶色の髪と目を持ち、眼鏡を掛け白衣を着たへらへらした笑顔の男が刹那に近づいてきた。

その男を見て西田は少し彼を睨みつけた。

「所長、今までどこにいらしていたのですか。ご自分で・・・」

「まあーまあーレイコちゃん。そんな顔していると、せっかくの綺麗な顔が皺だらけになっちゃうよ？」

「・・・そうさせているのはどこの誰ですか？」

「僕だねー」

「・・・もういいです」

「そう？」

「失礼します」

西田は嘆息を吐くと、礼をしてここから離れコンピューターの元へ行った。

東野は刹那に向き直るとにつこりと笑顔を向けた。

「それにしてもせっちゃん久しぶりだね」

明るく話しかける東野とは対照的に、無表情でそっけない返事をする刹那。

「その呼び方はやめると前に言っただけだ」

「相変わらず可愛い顔して可愛くないな」

「お前も相変わらず周りの人間に迷惑かけるのが好きだな」

「そのほうが面白いでしょ？」

「どうでもいい」

「全く、つまらないなあ」

東野はわざとらしく溜息を吐くが、刹那は全く興味がなかった。

「それより今日の用件は何だ」

「あれー？レイコちゃんに聞いてない？」

「・・・聞いている途中にお前に邪魔された。記憶操作制御アンドロイドとしか聞いていない」

「そうそう、今日はうちの子のことで来てもらったんだよ。あれ見える？」

そういつて東野はガラス越しに見える隣りの部屋を指す。指の指されたほうを見ると、そこには大量のコードにつながった2mほどの菱形の棺のような物があった。

「今はあの調整用ベッドの中に入って見えないけど、あの中にステラが眠っているんだよ」

「何だそれは？」

刹那の聞き返した質問に、東野は嬉しそうに振り向いて答えた。

「記憶操作制御アンドロイドのことだよ。可愛い名前でしょ？もちろん本人も可愛いんだけどね！」

でれでれ笑いながら答える東野は、すでに親バカ状態だった。

「・・・どうでもいい」

「つれないなあー。まあ話は戻るんだけど、これからステラには実践訓練に移ろうと思ってる。今までシミュレーション訓練をしてきたから一応記憶操作制御プログラムは大丈夫だと思うんだけど、もし事故が起きた場合、きつと僕たちではカバーできないと思うんだよ。だからサポートしてくれる記憶屋が欲しかったんだー。僕これでも一応管理責任者だから問題は起こしたくないし、アハハ」

何故いつも東野は重要な事を明るくさらっと言うのか、刹那には理解できなかった。

「そもでもってこれから一緒に訓練を共にしていくので、今日は初起動のついでに顔合わせのために呼んじやいました」

「・・・俺じゃなくて他の記憶屋でもよかったんじゃないのか？」

「君には以前、記憶操作制御装置を作る…予定のときに協力してもらったし、優秀な腕を持つ記憶屋『記憶人』に来て欲しかったんだよ。そしてこの国の記憶人はせっちゃんしかいないので、今日来てもらいました」！

東野はニコニコしながら刹那に笑いかける。

記憶人 それは世界記憶機関（WMO）に認められた記憶操作術を操り、世界になくてはならない記憶を持つ者のことを呼ぶ。今は世界に8人しかいない。

記憶人になると、生活費免除や様々な特権が得られるが、記憶人に認定されるにはそれ相応の実力と実績がなければならない上に、仕事はほとんどがWMOからの依頼になるため、あまり休みが取れない忙しい身の上となる。

「だったらもつと前から予約するんだな。国家最重要命令でなければ無視していた」

「いやぁーありがとね！さすが国家権力は違うわー」
「.....」

あははと楽しそうに笑うこの迷惑極まりない男を、一度黙らせた
いと刹那は思った。

「副主任、ステラの精神安定値が基準値より少し低めだがどうする
？」

「この程度だったら大丈夫です。ステラを起こしましょう。所長、
ステラを起動させる準備ができました」

「んー、OK。じゃあ、せっちゃんも一緒においでよ。ステラを紹
介するから」

楽しそうな東野に連れられて、刹那は隣の部屋の調整室に入った。
スピーカーを通じて塚田の声が聞こえる。

『じゃあステラを起動させるぜ。ベッドを開くからあんまり近づき
すぎんなよ』

「はい！」

「ずいぶん嬉しそうだな」

「うん！嬉しいよー！！だって今までステラの脳にアクセスして仮
想空間で会っていたけど、やっぱり仮想と現実は違うからね。今日
ようやく実際に会えるんだからわくわくするよ！」

「そうか」

『カウント入ります。10、』

西田がカウントを始める。

「ずっと仮想空間でコミュニケーションをやってきたのか？」

「そうだよ。だから記憶操作の知識だけでなく、コンピューターや

医療技術、一般教養に僕ら開発者の顔と名前も全部知っているはずだよ」

「・・・」

「・・・2、1、開きます」

待ちに待った眠り姫の、目覚めのときがやってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9977z/>

記憶屋交響曲

2011年12月30日22時45分発行